

第一章 光る源氏の物語 須磨の嵐と神の導きの物語

[第一段 須磨の嵐続く]

*なほ雨風やまず、雷鳴り静まらず、日ごろになりぬ(数日が過ぎました)。 *注に<「須磨」巻末の三月上巳の日の暴風雨を直接受けた語り出し。>とある。確かに、別巻とは思えないほどの続き方である。寧ろ、何故こうした仕分けに成っているのか疑問に思うくらいだ。前巻の須磨で年が改まった章から別巻にするほうが自然で、其の文も「須磨には年返りて」と如何にも巻頭の書き出しに相応しかった。尤も海竜王の不気味な影の登場で幕切れとなった巻末は後を引くのかもしれないが、此处まで来て読者は目先の興味で読み進むものでもないだろうに。とにかく今までに無いような続き方ではある。

いとどものわびしきこと、数知らず(何を考えても心細くなる事ばかりで)、来し方行く先、悲しき御ありさまに(過去も未来も悲しく思えて)、心強うしもえ思しなさず(とても気を強くは持てず)、「いかにせまし(どうしたものか)。かかりとて、都に帰らむことも(嵐に遭ったからと言って都に帰ったのでは)、まだ世に許されもなくては(謹慎も赦された訳でもないのに)、人笑はれなることこそまさらめ(物笑いの種になるばかりだろう)。なほ(いっそ)、これより深き山を求めてや(より深い山に分け入って)、あと絶えなまし(姿を暗ましてしまおうか)」と思すにも(と御思いに成るにつけても)、「波風に騒がれてなど(波風に怯えて逃げ出したなど)、人の言ひ伝へむこと(人の噂に立って)、後の世まで、いと軽々しき名や流し果てむ(後世まで情けない汚名を被りかねない)」と思し乱る(と思ひ悩みなさいます)。

夢にも、ただ同じさまなる物のみ来つつ(ずっと同じ様に海竜王の遣いらしき者が現れては)、まづはしきこゆと見たまふ(纏わり付いて来るような気がしました)。雲間なくて(雲の晴れ間も無いままに)、明け暮るる日数に添へて(日が経つにつれて)、京の方もいとどおぼつかなく(都の事情もますます気掛かりになって)、「かくながら(このまま)身を(復帰は)放らかし(はふらかし、立たず)つるにや(終いなのだろうか)」と、心細う思せど、頭さし出づ(かしらさしいづ、顔を出して様子を窺え)べくもあらぬ空の乱れに(そも無い雲行きに)、出で立ち参る人もなし(訪ねて来る人も居ません)。

二条院よりぞ(そんな中で二条院からだけは)、あながちに(嵐の中を無理をして)あやしき姿にて(ひどい格好になった使いの者が)、そほち参れる(ずぶ濡れで遣って来ました)。道かひにてだに(道ですれ違っても)、人か何ぞとだに御覧じわくべくもあらず(人か何ぞか見分けも付け為されそうも無い)、まづ追い払ひつべき(直ぐ追い払ってしまいそうな)賤の男の(しづのをの、下働きの者を)、むつまじうあはれに思さるるも(親しく懐かしい気がするもの)、我ながらかたじけなく(自分でも情けなく)、屈しにける心のほど思ひ知らる(卑屈になってしまった気の弱さに気付きました)。

御文に(若妻からの手紙は)、「あさましく(あきれるほど)小止みなき(をやみなき、少しも止まらない)ころの(此の所の)けしきに(雨模様)、いとど空さへ閉づる心地して(ますます空までが塞がるような気がして)、眺めやる方なくなむ(どうにも見晴らしが付きません)。

浦風やいかに吹くらむ、思ひやる袖うち濡らし波間なきころ」(和歌 13-01)

いかに嵐が須磨の浦、並々ならぬ波の間に」(意識 13-01)

あはれに悲しきことども書き集めたまへり(などと吐息交じりの悲しい気持ちが色々書いてありました)。いとど*汀まさりぬべく(源氏はますます涙が溢れそうで)、かきくらす心地したまふ(望郷の念に駆られていらっしやいました)。 *「汀増さり(みぎはまさり)」は水際が寄せることで、水嵩が増している状態であることから、涙が溢れる事を言う、という事は須磨巻他でも既に見た。また「汀優り」というと、一際目立つ、という意味(古語辞典)、ともある。

「京にも、この雨風、あやしき物の(吉凶靈驗の)さとしなりとて(教示であろうと)、仁王会(にんわうゑ、読経講)など行はるべしとなむ(などが宮中で行われる予定だと)聞こえはべりし(聞き及んでおります)。内裏に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ぢて(悪路で外出できず)、政事(まつりごと、政務)も絶えてなむはべる(も行われておりません)」 *「仁王会」については注に<国家鎮護・七難即滅のために「仁王護国般若経」を宮中で講じる。これは春秋の臨時の仁王会以外の特に行われるもの。 「る」(受身の助動詞)「べし」(推量の助動詞)、行われる予定であるの意。>とある。

など(などと二条院からの使者は)、はかばかしうもあらず(下級の者ゆえ詳しい事情は分からず)、かたくなしう語りなせど(たどたどしい話し振りだったが)、京の方のことと思せばいぶかしうて(源氏は京の事情が知りたいばかりに)、御前に召し出でて(御側に呼び出して)、問はせたまふ(話を御聞きになりました)。

「ただ例の(ずっとこのように)雨のを止みなく降りて(雨が小止みも無く降り続いて)、風は時々吹き出でて(時には突風も吹いて)、日ごろになりはべるを(幾日も過ぎますのを)、例ならぬことに(ただ事では無いと)驚きはべるなり(驚いております)。いとかく(まずこのように)、地の底徹るばかりの(地の底に通るほどに)氷降り(ひふり、雹が降って)、雷(いかづち)の静まらぬことは侍らざりき(はべらざりき、私はついぞ経験が御座いません)」など(などと其の使者が)、いみじきさまに驚き(大変な事のように驚き)懼ぢて(をじて、怖じて)をる顔の(いる顔の)いとからきにも(ひどく深刻そうな事にも)、心細さまさりける(源氏の心細さが募りました)。

[第二段 光る源氏の祈り]

「かくしつつ(このような天変が続いて)世は尽きぬべきにや(この世は終末となってしまうのだろうか)」と思さるるに(と御思い為さっていると)、そのまたの日の暁より(其の翌日の夜明け前から)、風いみじう吹き、潮高う満ちて、波の音荒きこと、巖(いはほ、岩)も山も残るまじきけしきなり(影も形も無くしてしまう様な勢いでした)。雷(かみ)の鳴りひらめくさま、さらに言はむ方なくて(ますます言い様も無く凄く)、「落ちかかりぬ(近くに落ちたか)」とおぼゆるに(と思える爆音に)、ある限り(其の場で)さかしき人なし(落ちて着いていた人は在りません)。

「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るらむ。父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔をも見で、死ぬべきこと」と嘆く(と嘆く供人が居ました)。

君は御心を静めて、「何ばかりのあやまちにてか(どれほどの罪によって)、この渚に命をば極めむ(この海辺で命を限りとせねばならないというのか)」と、強う思しなせど(気を強くお持ちでしたが)、いとの騒がしければ(大変な荒れ模様でしたので)、色々の幣帛(へいはく、お供え物を)ささげさせたまひて(神棚へ奉納させ為されて)、

「住吉の神、近き境を鎮め守りたまふ(畿内を鎮守して下さっています)。まことに(しかし本当に)*迹を垂れ(あとをたれ、救済を旨と)たまふ神ならば(為さる神ならば)、助けたまへ(どうかお助け下さい)」 *「迹を垂れ」は仏教用語の「垂迹(すいじゃく)」の訓読みで<仏・菩薩が衆生(しゅじょう)を救うために仮の姿をとってこの世に現れること。また、その仮の姿。特に、日本では在来の神を仏・菩薩の垂迹であるとする。(大辞林)>とある。

と(と源氏は)、多くの*大願(だいぐわん、大願成就)を立てたまふ(を住吉神に願ひ上げ奉り為されました)。 *「大願」は<大きなことを成し遂げようという願ひ。(大辞泉)>とあり、また仏教用語で<仏が衆生(しゅじょう)を救おうとする誓願。(同左)>とある。この行は非常に重要な一文と思えるが、注釈も無く、後文との段落もしないのは意外だ。此処の記述こそが、源氏がこの長嵐に過去も未来も悲観して、再起を諦めかけていた記述が前段にあり、そして今は住吉の神に「多くの大願を立て給ふ」に至った、という物語全体に関する正に劇的な場面、かと私には思える。

おのおのみづからの命をば、さるものにて(供人たちは各自身づからの命など然て置いて)、かかる御身のまたなき例に沈みたまひぬべきことの(このような尊い方が不遇に没してしまいかねない事を)いみじう悲しき、心を起こして(非常に悲しく思い一念発起して)、すこしものおぼゆる限りは(少しでも道理を弁えた者ならば)、「身に代へてこの御身一つを救ひたてまつらむ」と、響みて(とよみて、一斉にどよめいて)、諸声に仏、神を念じたてまつる。

「*帝王の深き宮に養はれたまひて、いろいろの楽しみに驕り給ひしかど(おごりたまひしかど、興じ為されたが)、深き御慈しみ(其の思い遣りの在る御人徳は)、大八洲に(おほやしまに、日本中に)あまねく(行き渡り)、沈める輩をこそ多く浮かべたまひしか(埋もれていた人材をどれほど多く役に就かせて浮かび上がらせなされた事だろう)。今、何の報いにか、ここら横様なる(このような不当な)波風には溺ほれたまはむ(波風などに溺れ為されなければ成らないのか)。天地(あめつち、神々よ)、ことわりたまへ(分けを御示し下さい)。」 *注に<以下「この愁へやすめたまへ」まで、供人の祈りと訴えの詞。ただし、後半「かく悲しき」あたりから源氏の詞に変わっている。>とある。詰まりは「大願」の客観的な要約になるわけで、中々に興味深い内容かと思う。また注釈に在るように「かく悲しき」から敬語では無くなるが、次の注釈で「罪無くて罪に当たり」から地文との指摘もあり、其の通りかと思うので其の通りの段落ちとしたい。

罪なくて罪に当たり、*官(つかさ)、位(くらゐ)を取られ、家を離れ、境を去りて、明け暮れ安き空なく、嘆きたまふに(嘆き為さると言う形に成った源氏は)、 *此処に在る「官位を取られ」という記述は、強いて言えば公による官位剥奪の明示、なのかも知れない。それでも血筋自体の祀り上げに組織基盤を置く時代に在っては、実質では命在る限り再起の可能性を残した<謹慎>だった事に変わりは無いだろう。だからこそ、骨肉の争いにもなるのだと思う。

「かく悲しき目をさへ見、命尽きなむとするは、前の世の報いか、この世の犯しか、神、仏、明らかにましまさば(本当に御出で為さるのなら)、この愁へやすめたまへ(この災いを御祓い下さい)」と、御社(みやしろ、住吉大社)の方に向きて、さまざまの願を立てたまふ。

また、海の中の龍王、よろづの神たちに願を(ぐわんを、鎮めの願いを陰陽師たちに)立てさせたまふに(源氏が上げさせなさんと)、いよいよ(呼応か最期か愈々以って大きく)鳴りとどろきて(雷鳴が轟いて)、おはしますに(祈祷講座の居間に)続きたる廊に落ちかかりぬ(続いた渡り廊下に落雷しました)。炎燃え上がりて、廊は焼けぬ。心魂なくて(こころたましいなくて、皆生きた心地も無く)、ある限り惑ふ(慌てふためきました)。

後の方なる(うしろのかたなる、奥の)大炊殿(おほいどの、炊事場)とおぼしき屋に(として使っている家屋に)移したてまつりて(源氏をお移し申して)、上下と(かみしもと、身分の上下も)なく立ち込みて(無く入り乱れて)、いとらうがはしく泣き(大騒ぎで泣き)とよむ声(どよめく声は)、雷にも劣らず。空は墨をすりたるやうにて、日も暮れにけり(そのまま夜になりました)。

[第三段 嵐収まる]

やうやう風なほり(すると漸く風が静かに直って)、雨の脚しめり(雨脚もしめやかに収まり)、星の光も見ゆるに、この御座所の(おましどころの、炊事場を殿の居間としているのも)いとめづらかなるも(随分奇妙で)、いとかたじけなくて(大変失礼でも在るので)、寝殿に返し移したてまつらむとするに(従者らは源氏を主屋にお返し移し申し上げようとしたが)、

「焼け残りたる方も疎ましげに(焼け残った所の始末が出来ず見苦しく)、そこらの人の踏みとどろかし惑へるに(其処等中人が踏み荒らして逃げ惑ったままだし)、御簾などもみな吹き散らしてけり(御簾なども風雨に吹き飛ばされている)」

「夜を明してこそは(朝にならないと掃除も出来ない)」

とたどりあへるに(などとまごつき合っている間に)、君は御念誦したまひて(源氏は読経をお上げに為りながら)、思しめぐらすに(この事態の考えを纏めようと為さったが)、いと心あわたし(とても落ち着いて結論に至る処ではありませんでした)。

月さし出でて、潮の近く満ち来ける跡もあらはに(高波が近くまで寄せて来た跡がはっきりと見えて)、名残なほ寄せ返る波荒きを(まだ鎮まり切らない荒波を)、柴の戸押し開けて(風が止んだので表戸を押し開いて)、眺めおはします(眺めていらっしゃいます)。近き世界に(田舎の事なので近隣には)、ものの心を知り(学識高く)、来し方行く先のことうちおぼえ(過去や未来の易に明るく)、とやかくやとはかばかしう悟る人もなし(この事態を上手く説明してくれるような賢者は居ません)。あやしき海人どもなどの(かえって身分の低い漁師たちなどが)、貴き人おはする所とて(偉い人が居る所だからと)、集り参りて(当所を頼って集まって来ては)、聞きも知りたまはぬことどもを(まるで聞き取れないような方言や俗語言葉で)さへづりあへるも(何やかやと話し合っているのも)、いとめづらかなれど(勝手な出入りなので甚だ不遜ではあったが)、え追ひも払はず(こんな時ではとても追ひ払えません)。

「この風、今しばし止まざらましかば(この嵐がもう少し続いていたら)、潮上りて(しおのぼりて、この辺りまで高波が来て)残る所なからまし(跡形無く浚われていた事だろう)。神の助け疎か非ざり去り(おろかならざりけり、十分でない事は無かった＝御蔭に他ならない)」と言ふを聞きたまふも(と地の者が言うのを御聞きに為れば)、いと心細しといへば(源氏はとても心細いと言うくらいでは)疎か也(おろかなり、十分では無い＝言い足りないほどでした)。

「海にます神の助けにかからずは、潮の八百会にさすらへなまし」(和歌 13-02)

「きっと神様を祀り上げて、禊ぎを果たして見せましょう」(意識 13-02)

*注に＜源氏の独詠歌。「ます」「潮の八百会」は祝詞の用語。「は」係助詞、仮定条件。「な」完了の助動詞、確述。「まし」推量の助動詞、反実仮想。もし助けがなかったら行方知れずになっていただろうに、助けがあったのでそうならずにすんだ、の意。住吉の神に感謝を述べる。＞とある。「八百会(やほあひ)」が祝詞(のりと)の用語と注釈にあるが、何の事か意味不明なのでWeb検索した。すると「につぼん文明研究所」なる少々畏まったサイトに当文言を含む「大祓詞(おおはらえのことば)」についての全文掲載と解説のページがありました。その解説を踏まえると、のっぺりした表面のこの歌は底意に意外に大きな意味を持っていそうに思えた。「詞(ことば)」本体は定型句や定型語法の多用で一定の音律を持つ謡になっていて、おそらく発声にも耳にも心地良いものなのだろう。その中でも引用の部分は「荒潮の潮の八百道の八潮路の潮の八百会に坐す(あらしほのしほのやほぢのやしほぢのしおのやほあひにます)速開津姫と言ふ神(はやあきつひめといふかみ)」という、音感上の重複も怒涛の畳み掛けを見せる一つのヤマ場である。そして当然に意味の上でも、全ての潮の流れが一つに纏まるという劇的な場面である。そして「詞」は其の纏まった流れは海底に飲み込まれ、やがて生命力の息吹きとして国の根に注がれると続き、そうなる事でこの世の全ての罪は祓い清められる、のだと言う。詰まり「潮」は＜罪を洗い流した水＞であり、それは山から川となって海へ運ばれた物であり、元は嵐の風雨であつた。何と、この話の設定とピッタリ符合しているではないか。さらに「詞」には、国が神の加護の下で繁栄する時には、殖えた国民が罪を犯すものだと言われている。何という洞察力の深さか。その見識は丸々今日の政治課題の捉え方にも寄与しそうだ。いや、実に真正面に政治問題として源氏は、というか作者は、この事態を提起している事に為る。そして解決法は、この「おおはらい」の「のりと」を「恐み恐み白す(かしこみかしこみまをす)」と御祀りすること、らしい。ま、さすがにこの解決法は、事象を整理して両極端を除き熟馴れた中間を用いるのが社会の和を保つ秘訣、という其の精神は参考に値するも、実際に御題目を唱えて解決を図るという手法は今日的とは言えない、気はする。尤も、「富」を求めて一定の時点で社会許容最大限の可能性を試行した仮供給が実需に対応するまでは、「失敗の清算」を人類社会が安定生存する為に地上生命体としての食物連鎖の均衡を得るべく＜収束する＝飲み込む＞までの時間が掛かる、という意味では、今日でも混乱が収まるまでは時を待つ以外に方法が無い、という限りでは、その間の気持ちを落ち着かせるには祈る他無い、とは言えるのかもしれない。ただ今日では、「失敗の清算」自体は収支計算に基く施政者の迅速な統治管理処理に期待される。しかし源氏は「失敗の清算」方法として、本気で「御祭」を考えた、らしい。其の標しとしてこの歌を詠んだと見るべき、かと思う。源氏が詠んだ「神の助け」は、地元民が寸での所で嵐が止んで助かったと話していた、という、一見それらしく見せかけてあつた危機を免れた其の事態自体、を受けたもの、なのでは実は無かつた。「海に坐す神」は速開津姫という＜穢れた潮を纏めて飲み込む神＞である。その「神の助けに掛からずは」とは＜神様が行うエネルギーの一括変換という荒技に拠らなければ＞という意味、なのである。「潮の八百会に」は＜禊ぎを受ける機会を＞で、「さすらへなまし」は＜逸してしまうだろう＞という意味。尚、「さすらひ」という語は「詞」の中でも＜罪惡の科を逸する、失う＞という意味で使われていて、源氏もその言葉を態と歌に詠み込んだものだろう。通せば歌意は＜御祭りをして御禊を成就させる＞という決意表明、ということになる。

ひねもすに(一日中ずっと)いりもみつる(ごった返した)雷の騒ぎに(かみのさわぎに、雷騒動に)、さこそいへ(一先ずの結論を得たとはいえ)、いたう困じ給ひに(こうじたまひに、お疲れになって居らした)ければ、心にもあらずうちまどろみたまふ(不意にうとうと為されます)。かたじけなき(寝所にしては粗末な)御座所なれば(避難所なので)、ただ寄りゐたまへるに(源氏が少し体を壁に寄り掛けて座って居らっしゃると)、故院、ただおはしましし(まるで在りし日の)さまながら(御姿さながらに)立ちたまひて(夢に現れ為さって)、

「など(何故お前は)、かくあやしき所にもものするぞ(こんな変な所に居るのか)」とて(と言って)、御手を取りて引き立てたまふ(源氏の手を取って引き立て為さって、)。「住吉の神の導きたまふままには(住吉神のお導きに従って)、はや舟出して、この浦を去りね(早く船を出して、この海辺を去りなさい)」とのたまはす(と仰います)。

いとうれしくて(源氏は嬉しさに思わず)、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた(有り難い父上のお姿にお別れ申してから此の方)、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや捨てはべりなまし(今は此処の浜で死んでしまうべきか、とさえ思われます)」と聞こえたまへば(と恨みがましく申しなさると)、

「*いとあるまじきこと(然様な事は決して有っては為らない)。これは(この天変は)、ただいささかなる物の報いなり(ほんのちょっとした魔物の仕業に過ぎない)。我は、位に在りし時、あやまつこと(不正を行った事は)なかりしかど(無かったものの)、おのづから犯しありければ(生きていれば必ず前例を破るので)、その罪を終ふるほど暇なくて(その和を犯した罪を彼の世で購う期間は自由に動けず)、この世を顧みざりつれど(この世の事情には目を向けなかったが)、いみじき愁へに沈むを見るに(お前が非常に不運に気を落としているのを知って)、堪へがたくて(自重していられずに)、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど(此処に来るのは大変な苦勞ではあったが)、かかるついでに内裏に奏すべきことのあるによりなむ(この際に帝に申し上げるべき事が在るので)、急ぎ上りぬる(今から急ぎ御所へ向かう)」とて(と言って)、立ち去りたまひぬ(故院は立ち去り為さいました)。 *注に<以下「急ぎ上りぬる」まで、院の詞。>とあるが、それにしても、此処の文は全体が意味を捉え難い。何を言っているのかも分かり難いが、故院の立場というか、立ち位置の設定というか、故院は事実を何処までどのように知っているのか、真実を何処までどのように知っているのか、其等が今までの記述からでは判然としないので、逆に此処の文から其等を探る事に為るが、分かり難い。なるべく蓋然性の有る言い換えを試みたが、余り手応えが無く、後で何度か見直しそうだ。

飽かず悲しくて(源氏は故院の束の間の立ち寄りの物足りなさに悲しくなつて)、「御供に参りなむ」と泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず(夢を見ていた感覚ではなく)、御けはひ止まれる心地して(故院の気配がまだ残っているように思えて)、空の雲あはれにたなびけり(空の雲が感慨深く棚引いていました)。

年ごろ(この数年は)、夢にうちにも見たてまつらで(夢の中にもお会い申し上げず)、恋しうおぼつかなき御さまを(恋しい思いの募るお姿を)、ほのかなれど(ほんの間ではあっても)、さだかに見たてまつりつるのみ(はっきりと拝見したお顔こそが)、面影におぼえたまひて(父上に違いないと確信申し上げ)、「我がかく悲しびを極め、命尽きなむとしつるを、助けに翔り給へる(か

けりたまへる、飛んで来て下さった)」と、あはれに思すに(感激なされた源氏は)、「よくぞかかる騒ぎもありける(これも大嵐の天変の御蔭だ)」と、名残頼もしう(収まりきらない悪天候さえ自分の味方の様に思えて頼もしく)、うれしうおぼえたまふこと(事態の好転を予感して嬉しくなる)、限りなし(ばかりでした)。

胸つとふたがりて(込み上げる思いで胸が一杯になり)、なかなかの御心惑ひに(気持ちの整理もつかぬまま)、うつつの悲しきこともうち忘れ(嵐の被害の惨状も目に入らず)、「夢にも(夢であっても)御応へを(おんいらへを、御話しの応答を)今すこし聞こえずなりぬること(もう少し出来なかったものだろうか)」といふせさに(と心残りで)、「またや見えたまふ(また御会い出来るだろうか)」と、ことさらに寝入りたまへど(わざと寝入ろうと為さったが)、さらに御目も合はで(とても寝付けないうままで)、暁方(あかつきがた、明け方)になり(に)にけり(に成ってしまいました)。

[第四段 明石入道の迎いの舟]

渚に小さやかなる(ちひさやかなる、こじんまりした)舟寄せて、人(見知らぬ者が)二、三人ばかり、この旅の御宿りをさして参る。何人ならむと問へば(家人が其の者等に何者かと尋ねると)、

「明石の浦より、前の守(さきのかみ、以前に播磨守を勤めた)新発意の(しばちの、新参入道が)、御舟装ひて(御迎いの御舟を用意して)参れるなり(参って居ります)。*源少納言(げんせうなごん、源氏御側用人の良清殿が)、さぶらひたまはば(詰めて御出でなら)、対面して(お目にかかって)ことの心とり申さむ(事の次第を説明致します)」と言ふ(と答えます)。 *注に<良清をさしていう。「さぶらふ」は「あり」の謙譲語、また丁寧語。「たまは」尊敬の補助動詞、良清に対する敬意。>とある。「少納言」は宮内省での調整役という公職名だが、この時の良清が官位を持つ筈も無く<源氏の御側用人>という意味での、敬意と親しみを込めた呼称なのだろう。使者は顔馴染みの良清を呼び出して、舟に居る入道の話を聞いてくれと言うが、入道はかつて娘に求婚してきて且つ其れを入道自ら跳ね除けた、国司の倅たる良清を、単に源氏に取次ぐ仲介者に頼もうという、それも臆面も無くという、価値観の持ち主である。

良清、おどろきて(意外に思って)、「入道は、かの国の得意にて(とくいにて、旧知の者にて)、年ごろあひ語らひはべりつれど(長年互いに親しくして来ましたが)、私に(わたくしに、私の姫御への求婚が破談にされたので個人的に)、いささかあひ恨むることはべりて(いささか互いに悪感情を持ちまして)、ことなる消息をだに通はさで(重要な連絡さえとらずに)、久しうなりはべりぬるを(久しくなっていて居りますものを)、波の紛れに(この嵐に紛れて)、いかなることかあらむ(一体何の用でしょうか)」と、おぼめく(見当が付きません)。

君の(源氏の君は)、御夢(おんゆめ、夢で故院が早く舟で此処を立ち去れと御諭し下された事)なども思し合はすることもありて(などが思い当たる事も在って)、「はや会へ(早く会って遣れ)」とのたまへば(と仰ったので)、舟に行きて会ひたり(良清は舟に行つて入道に会いました)。

「さばかり激しかりつる波風に(それにしてもあれほど激しかった波風の中で)、いつの間にか舟出しつらむ(いつの間に舟を出して来たのだろう)」と、心得がたく思へり(良清は不審に思っていました)。

「去ぬる朔日の(いぬるついたちの、この月初めの)日の夢に、さま異なるものの告げ知らせることはべりしかば(異様な靈魂が告げ知らせる事が御座いまして)、信じがたきことと思うたまへしかど(信じ難き事と存じましたが)、

『十三日に顕たなる験(あらたなるしるし、大いなる靈力の証を)見せむ(見せてやろう)。舟装ひまうけて(舟の用意をしておいて)、かならず(抜かりなく)、雨風止まば(あめかぜが止めば)、この浦にを寄せよ(この浦に直ぐ着けなさい)』と、かねて示すことのはべりしかば(予言がありましたので)、

試みに舟の装ひをまうけて(試しに船の用意を致して)待ちはべりしに(待つて居りました所)、厳めしき雨、風、雷の(いかめしきあめかぜいかづちの、重々しい天変に)おどろかしはべりつれば(正夢と気付かされたので)、人の朝廷にも(中国の政治でも)、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、

用ゐさせたまはぬまでも(光君が私の舟の用意を御利用なさらないとしても)、このいましめの日を過ぎさず(このお示しの在った日を過たず)、このよしを告げ申しはべらむとて(この予言があった事を御話し申し上げようと存じまして)、舟出だしはべりつるに(舟を出して来ました所)、あやしき風細う吹きて(不思議に風が収まってきて)、この浦に着きはべること、まことに神のしるべ違はずなむ(本当に神のお導きに間違いありません)。

ここにも、もし(此方でも若しや)しろしめすことや(私の来訪を知らされていた予言でも)はべりつらむ、とてなむ(お在りではなかったか、とも存じます)。いと憚り多くはべれど(実に恐れ入りますが)、このよし、申したまへ(この旨を光君にお伝え下さい)」と言ふ(と入道は話します)。良清、忍びやかに伝へ申す(良清は事荒立てずに源氏に伝え申します)。

君(源氏は)、思し回すに(おぼしまはすに、話を聞いて思い巡らすと)、夢うつつ(夢に出た化け物や故院の御話や実際の嵐の様子などが)さまざま静かならず(それぞれが穏やかなものではなく)、さとしのやうなることどもを(天の教示かもしれない其の幾つかを)、来し方行く末思し合はせて(過去と未来の意味に照らし合わせて為さって)、

「世の人の聞き伝へむ後のそしりもやすからざるべきを憚りて(嵐に怖気づいて怪しげな縁を頼ったとか言う後世の非難を恐れて)、まことの神の助けにもあらむを(本当の神の助けかもしれないものを)、背くものならば(退けたとしたら)、またこれよりまさりて(それこそ余程)、人笑はれなる目をや見む(物笑いの種になるだろう)。

うつつぎまの人の心だになほ苦し(実際に人の厚意を無駄にすることも随分気が重いものだ)。はかなきことをもつつみて(小さな事にとらわれず)、我より齡まさり(よはひまさり、年上だったり)、もしは位高く(または地位が高かったり)、時世の寄せ(権勢財力の)今一際まさる人には(頭抜けた人には)、なびき従ひて(付き従って)、その心むけをたどるべきものなりけり(其の意向に沿う様にするべきものなのだろう)。

*退きて咎なし(他人を立てて我身を引いて責められる事は無い)とこそ、昔、さかしき人も言ひ置きけれ。 *注釈に<『河海抄』に「孝経に曰く、退かざれば咎あり」とあるが、現存本『孝経』には見えない語句。『完訳』は「「退キテ謗言ナカリキ」(春秋左氏伝・哀公二十)などによるか」。『新大系』は「老子「富貴にして驕れば自ら其の咎を遺す。功成り名遂げて身退くは天の道なり」(運夷第九)などに由来する言か」と注す。>とある。文脈からして此处での「しりぞきて」は、<入道に従って余り我を張らず>という意味かとは思いますが、<畿内の摂津から山陽道の播磨へ退くことで朝廷の咎めを避ける>という事に通じる気はする。

げに(それに津波も落雷も寸での所で難を逃れたように)、かく命を極め(このように命を脅かされ)、世にまたなき目の限りを見尽くしつ(死ぬ間際の目に遭って来た)。さらに後の(今さら後世の評価に)あとの名を(晩節を汚す事を)はぶくとても(避けたところで)、たけきこともあらじ(大した事は無い)。夢の中にも父帝の御教へ(ちちみかどのおんをしへ、故院の御導きが)ありつれば(あったのだから)、また何ごとか疑はむ(この上はもう何も疑うことな無い)」と思して(と御考えになって)、御返りのたまふ(お返事を為さいます)。

「知らぬ世界に(謹慎の為に遣って来た見ず知らずのこの須磨の浦で)、めづらしき愁への限り見つれど(凄まじい嵐に遭ったが)、都の方よりとて(都からとして)、言問ひおこする人もなし(見舞いを遣す者も居ない)。

ただ行方なき(ただ宛ても無く)空の月日の光ばかりを、故郷の友と眺めはべるに(眺めていた所に)、*うれしき釣舟をなむ(嬉しい釣舟を寄越して呉れました)。 *注に<「波にのみ濡れつるものを吹く風のたよりうれしき海人の釣舟」(後撰集雑三、一二二四、紀貫之)を踏まえる。好意に感謝する。「を」格助詞、目的格。また間投助詞、感動。「なむ」係助詞。結びの省略。余情・余意を残す。>とある。しかし、踏まえるといってもこの引歌は、是だけでは何が「うれしき」なのかが意味不明。渋谷栄一教授の後撰和歌集のページに詞書が掲載されているが、其処に書かれているこの引歌の背景の設定は、貫之の家に不意に訪れた昔馴染みの女の車に妻の留守を良い事に忍んで乗り込んだ、という事らしく其処には海辺の想起は皆無だが、心象風景という事なら「波にのみ濡れつるものを(不安に揺れて泣き暮らしていたので)吹く風のたよりうれしき(不意の訪れに救われる)海人の釣舟(通り掛かりの来客)」とは読める。寧ろ、この引歌の分かりやすい背景としては、無人島に漂着した人が漁船の助けを喜ぶ場面だから、詞書よりも当場面こそが引歌の情景に相応しく、となると是は作者の洒落心なのかもしれない。

かの浦に、静やかに隠ろふべき隈はべりなむや(静かに身を隠せる片隅があるのだろう)」とのたまふ(と仰います)。限りなくよろこび(入道は源氏の乗船承知を非常に喜んで)、かしこまり申す(畏れ入りますと応えます)。

「ともあれ、かくもあれ、夜の明け果てぬ先に御舟にたてまつれ(夜が明け切る前に源氏の君を御舟に御乗せ申し上げよう)」とて、例の親しき限り、四、五人ばかりして、たてまつりぬ(いつもの近習の四、五人だけが源氏の供に連き従いました)。

例の風出で来て(すると例の不思議な風が吹き出して来て)、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。ただはひ渡るほどに片時の間といへど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり(それにしても驚くほどの追い風振りでした)。